

藤村——「若菜集」以前

佐藤泰正

「藤村は、いわば生ける透谷よりも、むしろより多く透谷の死そのものを自らの拠点として巢立ったのである」（猪野謙二「透谷から藤村へ」）。

「……藤村は何とかして生きたいとねがった。彼ら（独歩・藤村）はめいめいのねがいによって、透谷の破滅をきりひらいていったとみえる。しかし、彼らは何かを大きく誇いだのだ」（梶谷秀昭「北村透谷論」）。

「藤村はたれにもまして大きな影響を透谷から受けながら、しかもかれの鮮烈な生き方をついにまなばなかつた。藤村がたえず振りかえりながらそのかたわらをすりぬけてきた生き方、あらゆる妥協をしりぞけて破滅する情熱的な生の軌跡が、青山半蔵のなかでふたび定着されたのである」。「理想を追って狂死する半蔵の風貌には『春』の青木、つまり北村透谷の記憶がいくえにもかさねられていたようである」（三好行雄「嵐の意味」）。

これらは多くの評文中よりの二、三の例示にすぎないが、そのいずれもが「透谷と藤村」あるいは「透谷から藤村へ」の、問題の核心を鋭く照射しているかにみえる。

「何かを大きく誇いだ」という——その言い難い「何か」。生涯「

藤村——「若菜集」以前

そのかたわらをすりぬけ」ながらも「たえず振りかえ」らざるをえなかつたもの、「長い年月の間私は北村君といふものをスタディして居た」と言いながら、ついにその「鮮烈な」生から「学ばなかつた」あるいは、学びえなかつたもの。その生よりも死が自らの「巢立」ちの「拠点」でありながら、その死が彼の文学開眼に、何を与え、また与えなかつたのか。問いは無数にある。透谷というこの近代文学におけるひとつの原点は、そのまま問うもの自身にとつてひとつの試金石となる。もはや明らかであろう——われわれにとつて「透谷から藤村へ」を語ることは、ついに「藤村から透谷へ」を語ることにほかならない。

然し、ここで「透谷と藤村」という課題を扱うことはあまりに重い。この小文の主意は、言わば透谷を軸としつつ、藤村が初期の習作時を脱して「若菜集」の詩人に変貌してゆく——その一過程をさぐるにある。

透谷の死そのものが、藤村の出発の拠点であったという——その最初の死の刻印は、何にはじまるのか。評家のみるところはさまざまであるが、私はこれを、そのほとんど死の直後といつてもよい時期に書かれた「一篇の抒情詩「蟬」」にみる。

△草の間にぬぎすてし／恥の殻をもかくさずに／夏の日影に照ら

されて／ひとり木梢の影に鳴く

右に舞ひ行く蝶見れば／露より露に酔ふものを／薄き羽をば持ちながら／重き身を置く花もなし

左に匍へる蟻見れば／土にも穴のあるものを／かなしや塵にむせばれて／いづこに置かんこのつばき

蝶よ恋し蟻よ恋し／舞ひも得ならず匍ひも得ず／うつる夕月に身を染めて／ひとり木梢の影に鳴く（『文学界』一九号、二七年七月）。

笹淵友一氏はこの詩が、まさしく「藤村詩の転機を示す」ものであり、「嘗ての即興詩と全くちがふ点は雅気・銜気を一掃し、風雅意識をも蟬脱した真実の抒情の声である」ことを指摘し、しかもこれが、後の「若菜集」やその他の詩風とも異なり、「透谷的である」こと、「即ちこの詩の方法は自然描写を通じて自己の情緒を表現しようとする藤村の方法ではなく、詩人自身を直接かつ全的に表出しようとする透谷的、象徴的方法である」こと、さらにはこの詩が「安任の住家をえない生の苦惱、孤独、不安を蟬のイメージを通じて実感化し」、「全篇に漂ふ情調が、透谷晩年の抒情詩に極めて近い」ことを指摘されている。そうして、このような「藤村の個性をも刻み込みながら従来の面目を一新した詩が透谷の死後間もなく書かれてゐることは偶然では」なく、「透谷の急死によつて受けた感動の深さが、この詩を生む重要な契機であつた」と目されている。

確かにこの詩の成立に、透谷の死が、その「眠れる蝶」などの詩篇が、深い影響を与えていることは疑いない。その影響については、この笹淵氏の評文にあますなく精細に論じられているかにみえ

る。しかし、にもかかわらず決定的なことは、ここには自らを「直接かつ全的に表出しようとする透谷的、象徴的方法」にもかかわらず、また透谷の死による衝撃の深さを契機としているにもかかわらず、われわれはついに、ここに藤村自身の内面を、その心の波動を、なにひとつ受感することはできない。

△舞ひも得ならず、匍ひもせず▽の一句にさえ、われわれはいかなる生の不安をも、魂の揺動をも感ずることはできない。ここで、これを一篇の弔詩とする見方もある。

「蟬」の悲調は、一度「透谷集」（一〇月八日「文学界雑誌社」発行）を編んでいる最中に出来た詩であつて見れば、おそらく透谷の詩の滲透は考えられることだ。しかし、それは単なる模倣、あるいは影響というような発想によるものではなく、痛切に友の死を弔う密かな悲哀の情意から生まれた詩かと思ふ（『青年藤村とその周辺』）とは島崎翁助氏の言葉である。しかし、この詩の感觸は弔詩のそれではない。作者自身の心情にまつわりつく重さがある。あえて言えば個人的な一時期の生活の体感ともいふべきものか、この詩を重く引き据えている。事実この時藤村は、透谷の死と共に累縁の不幸を一身にならざるを得ない事情にあつた。すなわち周知の如く長兄秀雄の公文書偽造行使の嫌疑による収監、「廢人同様の状態」で三番目の兄友弥も長年の放浪生活から母の許に還つて同居しており、次兄広助は朝鮮方面に出かけて留守中のこと（島崎翁助）であり、一家の負担は二重三重に、藤村の一身にかかつていた。

△恥の殻をもかくさす▽△重き身を置く花もなし▽△舞ひも得ならず匍ひもせず▽——これらの未熟な詞調の引きずる感觸と重さ

は、明らかにこの時期の藤村の心情を語っている。一見この詩が、透谷の死とその詩篇よりの深い影響下に生まれたかみえつつ、またそこから自らを真に掘り起こすべき何ものかを汲むべき機縁を含みつつ、遂になにもをも把みえていないことは明らかであろう。むしろその機縁のゆえに、また両者の差異はより明らかである。はたして、藤村の『透谷的方法』への接近はこの一篇をもって終わり、しばらく抒情詩の制作は断たれ、ようやく一年の後にして「ことしの夏」〔文学界〕三一号、二八年七月の総題を持つ九篇の詩が発表される。ここに至ってわれわれははじめて、まぎれもない一箇の詩人の誕生を見る。

△あゝ、あゝ、動いて、新しき、星に涙を賤がばや▽〔新しき星〕。

△瀬にこがれ行く若鮎の／慕ふが故に、慕ふなり、▽〔若鮎〕。

すでにここには透谷的志向や苦悶からは遠く——疑いもない「若菜集」の詩人が登場する。もちろん「若菜」の詩篇が書きはじめられるのは、さらに一年の後であるが、しかしあえてわれわれはそう呼ぶことができる。

△星はあれども攀ぢがたし／花はあれども摘みがたし／独り草のみ青くして／踏めども踏めども、新たななり、▽〔青草〕。

ここに至って藤村の生涯をつらぬく、あの否定ならぬ「肯定の苦」への踏出しの予感が、「地上への愛」による「生の充実」(笹淵)の実感が、いまはじめて自らの文体を得て、したたかに吐露される。

この言わば藤村が真に藤村になったとも言いうる——詩人の誕生の機微をあかしするものは何か。われわれはそのひとつとして、同じ「文学界」の前々号に発表された評文「聊か思ひを述べて今日の

藤村——「若菜集」以前

批評家に望む」〔文学界〕二九号、二八年五月)を挙げるべきであろう。

「極端な欧化主義、それに対立する国粹保存の声、それらの激しい争ひが次第に沈まつて行つて、東西のものの調和といふことがさかんに唱へられるやうに成つた。さうした調和的思想が一切の學問や藝術の世界を支配して居た」(昨日、一昨日)明治二十年代の半ばにあつて、「あらゆる粹の粹をぬきあつて、よろづの美を一堂のうちに集めよ」という「調和的思想」を排し、「詩文の依つて立つべき領土」たる「純粹なる日本想」の探索の要を評家に求めたものであるが、その末尾に次の如き言葉がある。

「今日こゝにあり、吾人は今日と共に歩めり。吾人不幸にして自ら誇るべきものなし、ただ誇るべきものは今日のみ。これありて万象味ひあり。これありて始めて吾人は過去の化石たることを免かるゝを得んか。今日果して夢か、果して非か、吾人は厭世樂天の真味を解するものにあらず、されど活きたる厭世家は死せる樂天家に勝利と思ふなり。俗、非俗、もとより言ふべからず、されど活きたる俗人は死せる理想家に勝利と思ふなり。神といひ、人といひ、もとより不才の透視し得べきかざりにあらず、されど活きたる人は死せる神に勝利と思ふなり。」

言う処は明らかである。後に「何もかも新規に始めねば成らなかつたのが自分等の青年時代であつた。……漠然とした調和といふやうなものが何を自分等に齎さう、自分等青年はもつと直接に自分等の内部に芽ぐんで来るものを重んじ育てなければ成らないと考へた」(昨日、一昨日)という如く、すべては、この「今日」只今

の自分から出発するほかはなく、この「活きたる」自己から始めるほかはない。自らの裡に、たとえば八墓が故に慕ふなりVとでも言いあらわすほかはない、理否を絶して湧きやまぬ——このなにものかを汲みつくすほかはなく、また、八踏めども踏めども新たなV——この裡なる芽ぶきに忠実であるほかはない。ここに彼のひとつの決定的な開眼があったと言つてよい。恐らくこの評文の結語は、透谷死後の藤村にあつて、見逃すべからざる転機を示すかみえる。

たとえば、先の一節中の「活きたる俗人は死せる理想家に勝れり」の一句をめぐつて、透谷死後の「文学界」を覆わんとする、上田敏（さらにはその同調者たち）の「死せる、エキゾチズム」を排し、「現実のただなかにおいて」ゆかんとする生活者としての「宣言」をみるとは、三好行雄氏の指摘する処である。「透谷における『予言者』は藤村にいたつて一個の『芸術家』への転身を完成した」（猪野謙二）と言われる——その「芸術家」としての完成の前夜に、あえて俗人の場に降りたつて生きる生活者の意識を指摘しておきたい」と三好氏は言う。この一句は上田敏一派の高踏性を持つと共に、また翻つては透谷にも向けられる。

透谷の欠くものもまた、この「八生きたる俗人Vの観点」ではなかつたのか。彼は「荒野に呼ばう者であつても、荒野を生きる者ではなかつた」。「壁をひたむきに破らうとして挫折した透谷に対し」「壁を破つて出てみてもしかたがない——壁のむこうに壁があるというぎりぎりの自覚に支えられながら、壁の内側で、つまり、透谷にとつては性急な否定の対象でしかなかつた世俗の世界で、自己の

生きてだてを発見しようとする困難な転身」が、そこにはかられたと三好氏は言う。ここには、この一句をめぐる卓抜な指摘がみられる。しかしまた同時に、この評文の結尾の部分に、透谷と藤村とをわかつ決定的な一点を見んとするならば、「活きたる人は死せる神に勝れり」の一句をもまた、見逃すことはできまい。ここで藤村は確かに、透谷の遺したなにかを「大きく跨いだ」はずである。

藤村にあつて「死せる神」とは何か。この問の機微を示すものは、同じ評文中のしばしば引かれる次の如き一節であらう。

「招かば来り給はざることなき、とつくにの神も、吾山水と吾人情とによりては、僅かに其空殿のみを残したまふて、知らぬまに既に遠く帰したまふこと少なからず。／＼モオセがシナイの高嶽の巖上に伏してエホバの神より無限を学びたまふ間に、赤人は富士の高根のかげにさまよふて吾国の自然を学びたまへり。」——ここに透谷の「富嶽の詩神を思ふ」（二六年一月）がひびいていることは明らかである。

「尽きず朽ちざる詩神、風に乗り雲に御して東西を飄遊し玉へり。富嶽駿河の国に崛起せしといふ朝、彼は幾億万里の天帷よりその山嶺に急げり、而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐まり棲みて、遂に復た去らず。……詩神去らず、この国なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。」

「とつくにの神」の「知らぬまに既に遠く帰したまふこと少なからず」の一句に、透谷の詩神——「遂に復た去らず」の一句がひびいていることは疑いあるまい。また、「富嶽の詩神を思ふ」一篇を

媒介とし、透谷より藤村へ「詩神の觀念の伝授が成立」し、「これが藤村の人生を支配するものになった」とは勝本清一郎氏の言であるが、この指摘の意味する処は深い。詩神——「逐に復た去らず」とは、皮肉にも藤村の生涯を覆う光暈を指すかにもみえる。確かに勝本氏の指摘される如く、透谷のこの評文を手にして間もなく一週間の後には「富士山の詩神あり」と拜むにあまりあり、「かの詩神をたづぬるに、詩神なほ影ををしみて、愚が風塵に心あるを疑へり」など「詩神」の語が、その書簡中に（天知、透谷、夕軒、禿木宛、二六年二月七日）五回に亘り繰り返されている。しかしそれは果たして、正しい意味において「伝授」と言いうるものであったのか。

勝本氏は、透谷が「詩神という觀念」を打ち出したのは、「文学界」一派にとってそれまでの神の觀念は倫理神であった。しかも「当時の一般の日本のキリスト新教界では非常に次元の低いところ、つまり山路愛山の次元で考えられていた」。「それを打ち破るのに透谷は詩神といふ觀念を出したので」あろうという。しかし果たしてそうであるか。ここにこの評文をめぐる周知のエピソードがある。

透谷は当時この評文が意外にも新聞などで賞讃されたのを見て、「こんな花やかなものを書きさへすれば、歡迎する、かう云ふ世の中だからいやだ、おれはこんなものを書くのが本領ではない」と云つて非常に憤慨した（北村ミナ「春と透谷」という。これは少なくとも自身の評文に全身的な重さを賭け、あえて画期的な何ものかを打ち出さした者の言ではあるまい。事実、この「詩神」の觀

念は爾後、透谷の作中になお深く追索された跡もなく、ついにこの詩人の心を領略しうるものでなかったことは明らかである。「伝授」ならぬ伝受は、むしろ一方的に藤村にあってなされていったといえよう。関西への漂泊の旅のはじめに「文学界」一卷（創刊号）が手にされ、透谷の「富嶽」の一文と共に、藤村の劇詩「琵琶法師」が収められていたことは意味深い。

透谷の「蓬萊曲」に觸発され、多分にその影響を受けたとみられる最初の劇詩「琵琶法師」の主旨をなすものが、八まぼろしの滄浪万里、五十年／いづれ身を捨つべきものと定めなば／後の世の春をたづねん、木の下に／後の世の月をたづねん、ほと／ぎす／といふ、琵琶法師一鴻の詠唱にみる超俗思想と、さらには、八わが琵琶はこれ天地なり、仏なり／見渡せば乾坤万里、万山川／山は落ち海は涸れなん世なりとも／人は死し鬼神も泣かむ世なりとも／わが琵琶の音はいかでかはらん／という言葉に見る如く、また貧窮の裡に非業の死を遂げつつも、その琵琶は勅使の手によって朝廷に献せられるという結末に見る如く、芸術至上の想念に立っていることは明らかである。その題下に付された紹介文の「聖俗、肉靈相闘ふの一惨場なり」という言葉にもかかわらず、ついに靈肉二元の葛藤の跡は見るべくもない。

琵琶を投げうって苦悶の裡に死を迎える「蓬萊曲」の柳田素雄と一鴻を較べあわせるならば、「みずから芸術さえ疑わずにはいられたなかった狂想者の内的悲劇と、たとい貧窮のうちに死んでもその芸術が俗界の権力者によって認められる光榮（？）と、あまりにも大きな相違である」（白井吉見）ことは、何人の眼にも明らかである

う。「透谷の内的苦悶は、藤村には影すら投じていない。内的苦悶のもたらす外的情況の巧妙な模倣だけがある」（白井）という批評も、あながち極言とはいえない。このいまた自らの文体をも、拠るべき思想的主因をも持ちえなかった内面の空白が、「詩神」の観念によって容易に領略されていったことは肯げよう。

「吾人情（民族的心性）」と「吾山水（伝統的自然観）」への新たな日本想となる想念とやがて一枚に重なってゆく。かくして「倫理神」としての「とづくにの神」は止まるべき地を知らず——やがて消え去ってゆく。「知らぬまに既に遠く帰らたまふこと少なからず」とは、そのまま藤村自身の内面を語るものにはかなるまい。「死せる」の一句の含むところを辿れば、ほほこのようなるものであろうか。

藤村は後にこの「聊か思ひを——」の一文にふれて、「あの感想を書いた頃から私には自分の行くべき細道が一層はつきりして来たやうにも思ふ」と語っている。その「細道」とは、先にも引いた「自分等の内部に芽ぐんで来るものを重んじ育て」ることであり、また透谷の「後を追つて、もつと心の戦を続けて行く」ことでもあった。しかしすでに見る如く、彼が自らの内部に芽ぐむものに眼を開き、その根源なるものに忠実たろうとする時、透谷とはつきり異なる地点に立つ自身を発見せざるを得なかった。ここに透谷の後を追う「心の戦」が、実は透谷的世界や志向からの転身によって果たされるという——逆説が生まれる。

透谷死後の「文学界」の迎えた第二の時期にふれ、「このわたしたちの第二期を迎へて、惜しい北村君の死を見送り、基督教的な苦

悶からもやゝ遠ざかつて、西欧文芸復興期の探究に向ふやうになつたのも自然の勢いであつたと思ふ。ルネッサンスの発見はわたしたちの同人に取つて、かなり大切なことであつた」とは、しばしば引かれる回顧の言葉であるが、透谷の死を見送ると共に、キリスト教的苦悶から離れ、ルネッサンスを迎えんとしたという時、それは「文学界」同人の推移を語ると共に、より深く藤村自身の内面の、ある深い転回が語られたとみるべきであらう。かくして「死せる神」を葬り、「活きたる人」の現実立ち、自らの裡に八階めども踏めども√つきざる芽ぶきを見出しえたところに、「若菜」の抒情を先取するかか如き「ことしの夏」一連の抒情詩は生まれた。われわれはここにまぎれもない一箇の抒情詩人の誕生を見、その肉声をはじめて聴きとることができる。

恐らくここから「若菜集」を経、また一面自らの古い家系に流れる頹廢の血の自覚と共に、「家」を頂点とする一連の散文の世界を辿り、さらに「若菜」に通ずる後期ロマンチズムの顕現ともいへべき「新生」「海へ」より「夜明け前」「東方の門」と続く、その道程を見透かすことは、さして難しいことではあるまい。「死せる神」の自覚と「日本想」の探索とは、恐らく藤村の全作品をつらぬく縦の糸ともいへべきものであろう。

二

我々は今「聊か思ひを述べて今日の批評家に望む」の一文をめぐって、「死せる神」と「日本想」という、「若菜」の詩人の誕生、さらには藤村の生涯をつらぬく主要な二つの課題についてふれた。然しここに顕示された問題は、さらに遡れば、すでに教会離脱後、

関西への漂泊の旅にはじまる。あの二十六、七年の交「文学界」に発表された一連の評文にみる事ができる。たとえば彼がその旅の途上から送ったものとして、屢々引用されるものに「馬上、人生を懐ふ」(「文学界」二号二年二月)、あるいは「人生の風流を懐ふ」(「文学界」四号二年四月)などがある。

「まことの達観の士は世にいふ厭世もなく楽天もなし。その胸中に無限の春あつて、天地悠々いふべからざるの風情その間に存す是境をさして無量といひ、無辺といひ、無限といひ、極致といひ、理想といひ、風流といひ、神といふ。されば月花は無限の風情にして基督は神の風情たり」(「馬上、人生を懐ふ」)。

「小微笑界の恋には『ペルソン』を主とすれど、靈界なんぞ『ペルソン』を主とせんや。小微笑界の恋人は老荘の如く孔孟の如く西行の如く芭蕉の如く如来の如く基督の如く、大微笑界の恋人は虚無の如く仁義の如く風雅の如く詩神の如く真如の如く造化の如し」(「人生の風流を懐ふ」)。

これらの美的詞調の裡に、キリスト教思想と風流思想、また東洋的幽玄やプラトニズムなど、さまざま思想の無差別な混淆をよみとることはたやすい。また「基督は神の風情たり」などの一句に、「神は風流と類似概念であり」信仰が人格の問題よりも詩的情緒に近づいている(笹淵友二)という如き矛盾を讀みとることもたやすい。またここに「青春の」情念をいわば神に通ずるものとして、強く肯定しよう(瀨沼茂樹)とする志向をも讀みとることが出来る。しかし、これらの美文の表白の根底にある藤村の当時の心境を、その「心の色」を最も深く示したものに「哀縁」(「文学界」

一―号二年十一月)一篇がある。(これは後に「一葉舟」に収められたが、その後半にかなり長い省略がある。)

このひとりの童子と川を流れゆく紅の花との対話を描いたメルヒェン風の作は、習作時における藤村の作中、第一等の佳篇というべきものであろう。しかもこの作の意義は、彼が教会離脱の心境にかかわる一面を、あざやかに描き出しているところにある。しかし、以下に掲げる初出の箇所は、後にそっくり省略されている。

童子と花との楽しい語らいのさなかに、ひとりの男が現われ、童子の教会よりの離脱をなじる。

「いかに釣を好める人、けふこのごろは会堂のうちにて君の影を見ることなし。この前の日われは姉と共に行き、その前の日われは母と共に行きけるが、例の大なる『ストープ』の影に君の見えざるはいかにぞや。このごろの賛美歌、『オーガン』、花、説教、げに一ツとして心に楽しからぬはなし。さてもいみじきものしりとはなられつらむ」

童子は答えていう――

「ああ神仏は盲目なり、もし盲目にておはさざりせば、かく迄恨み多き人の世にはあらざりしものを。……誰か世に盲目ならざるものやある。花にまよひ月にあくがれ、雨にぬれ露にふす。臥すより早く露の命をなげくものは誰ぞ。嘆げかむ迄の命とは知りながらまた花と月とにまよはんとするものは誰ぞ。……けふといふけふの人はきのふの人にあらずして、あすといふあすの花はけふの花に同じからず。あたたかきストープの影、高らかに鳴りひびくオーガンのほとりのみ、会堂といふものにてあらぬべし。われは岩と眠

り、草に臥し、水鳥を友として釣をたるるのみ。一つの草にも説教あり。一つの岩にも讚美歌あるべし。以下さらに次の如き言葉が続く。

「おかしや今一度いふて見よ。／小兒のくせに世をすねたりとて、魚鳥を友とするは仙人の業のみ。けふといふけふのいとなみを知らずしてひたすら水のほとりにさまよふこそをかしけれ。おかしとは何事ぞと眉をつり上げ、顔は赤くなりて言はんとして口ごもり、胸は充ち、心はせまり、とかくするうち秋雨はほろほろと落ち来りて、かの人の影いづこともなく消うせぬ、童子はひとり残されて、袖をかみ、こぶしを握り、顧れば花は遠く雨にせかれて、かなたに流れ行くを飛ぶが如くに馳せよれば、あはれ先だつものは涙のみなり。」

花よ。花よあ世にわれほど心弱きはあらざるべし。われはかの人の前に向ふとき身は虫けらの如くにも覚えられて、ただただ心細きを命なるに、いかなれば汝の前に向ふとき、かく迄に我身の強きを覚ゆるぞやといへば、さ嘆きたまひそ。人はさやうの心もちてこそ。聖のおんあはれみにももれぬべけれなどいふ（傍点筆者）。

今日「一葉舟」にみる「哀縁」一篇は、一箇の美しい童話風の散文詩ともみられるが、その背後に、このような教会離脱に伴う心情のはげしいゆらめきのあったことを見逃してはなるまい。男になじられて、恥じ、いらだつ童子を描く尋常ならぬ描写の裡に、私は藤村自身の心の昂ぶりをおぼえる。

恐らくこの一文の主意は、引用末尾の「かの人」の前にあつては「虫けらの如くにも」「心細く」思われる身が、一片の花に向かつ

ては「かく迄に我身の強きを覚ゆる」という告白にあるとみてよからう。ここにはみずからの心性への傾きが、深い心情のゆらめきとして吐露されている。

しかもこの一篇はその末尾の示すカタストロフにおいて、さらに深い彼の心のゆらぎを示すかにみえる。

「あはれむかしより盲目と伝へたるえにしのほど果敢なしや。かの花は瀬に乗りたりと覚しく、するすると流れ行きけるが忽ちうろくづのうちからまり、あはれげに廻り居るにぞ、見ればまなこも昏むばかりにて、いかにもして再び水に浮べんものと岩づたひに水に下りしが、今やさしのばしたる右の手のもろくもかの花にとどかんとせしとき、古昔幾百年のさびに滑りて童子は花と共に沈みぬ。」

ここに示されるものは、また後の「若菜集」中の「若水」（三十年一月）「逃げ水」（二九年十月）の両詩篇の示す処に、深くつながるかにみえる。この二篇の詩が、ともに聖書・讚美歌の詞章を踏まえつつ、然も、ひとつは八かのわかみづと／みをなして／きみとながれん／花のかけV（「若水」終連）と唱う如く汎神性への傾きを深く示し、また、いまひとつは人のいりもつとめも／このつみゆゑ／たのしきそのへと／われはゆかじ、なつかしき君と／手をたづさへ／くらき冥府まで／かけりゆかんV（「逃げ水」四、五連）と言う如く、人間的な愛の情念の肯定と、それゆえの暗い破滅への予感を語っていることは、周知の通りである。

この「哀縁」一篇こそは、これら「若菜」の詩篇の含む処を、よりみずみずしい萌芽のかたちにて於て定着しえたものと言えよう。然も

先にもふれた如く、自らの分身を死に至らしめざるをえない、その終末の示す破局は、なお彼の心の未定着な、深い動揺を示すかみえる。恐らく、この作を含むその最初の旅の、総決算とも目されるものは、劇詩「草枕」（「文学界」十三号・二十七年一月）一篇であろう。

明治二十六年一月、教え子佐藤輔子との果せぬ恋の故に、明治女学校を辞し、教会をはなれ、ひとり赴いた関西への漂泊の旅、さらに転じては東北の一ノ関にまで赴き、同年十月帰京するに至る——この人生の最初の危機における旅の後に——より正確に言えば、帰京の日よりおよそ三ヶ月ばかり後の、翌二十七年一月十八日——この作は書き上げられている。この旧約のアダムとイヴの物語、あるいは「失楽園」のパロディともみられる作の主旨は、末尾の次の如き言葉にあるとみてよからう。

「（アダム）なんの後悔することがあらう。この花園ばかりが宿かいの。二人で添うて暮すなら、あのおそろしい地獄も極楽。……（イーブ）ああそうぢや。こうして添はるるものならば、闇でもいい。地獄でもいい。……ああ生きらるるだけは生きて見たい。添はるるだけは添うても見たい。」

この旅の途次、九月、関西よりひとたび帰京の後、戸川秋骨のはからいにより輔子に手紙を書き、逢瀬をたのしむこともできたが、すでに女が婚約者のある身であれば、それもただ精神的な恋情にとどまるほかはない。その後ある時は押えがたい欲情のゆえに一夜を品川の妓楼に過ごし、自らの愚かしさを恥じては剃髪し法衣をまとって東海道を下り、冷たい「墳墓」の如く横たわる夜の海を前

藤村——「若菜集」以前

に、死を想いつつも「此の世の中には自分の知らないことが沢山ある——今ここで死んでもツマラない」と思い返す。藤村自身「春」のなかで語ったこれらの事件の上に、いま劇詩「草枕」を置き重ねてみれば、この作の語るところはおのずからに明らかであろう。

失楽の男女を描いて「草枕」という、一見内容にそぐわぬ題名を付した——その底には、この旅の総量が深くこめられていたはずである。「草枕」の題意を、評家の言う如く「楽園を追われた『人生』への門出——『新生』への希求とみることも当然であろうが、同時に、すでに終った旅の重さが、その意味するものへのしたたかな肯定の意義が、こめられていたとみることも、あながち附会の論とのみは言えまい。

あの周知の詩篇「草枕」が第二の旅——「若菜集」を生んだ仙台への旅に「みずからあたへた」「意味づけ」であったとすれば、この劇詩「草枕」は、その最初の旅の「意味づけ」であったと言えなくはなからう。敢て言いきってしまったえば、この劇詩「草枕」から——あの「死せる神」云々の一句へは、もはや教歩の距離にもすぎまい。すでにここでも彼は、透谷の遺したなにかを、跨がんとしていたはずである。

八見よや、われを納むべき天は眺るが内に高／＼きより高きに、蒼きより蒼きにのぼりのぼりて、わが入る可き門かどはいや遠みV——とは、「蓬萊曲」中の一節であるが、ここにみる透谷の、土着的エトスとキリスト教的思想との対峙、反立、また渾融の問題は、彼の裡にあつて最後まで、矛盾のままに、重層的に、併存していたとみえる。その切り口は深くひらかれ——そのままに彼の命は絶たれた。

先にもふれた如く藤村は明らかに「蓬萊曲」の影響を受けつつ、これを摸して「琵琶法師」以下三篇の劇詩の、甚だ不毛な試みをした。そうして彼は最後に、みづからの最も関心深い主題を、旧約物語のパロディの如きかたちに於いて記した。「朱楽」の、追われるものの痛みを題材としつつ、然しそこには入われを納むべき天はVいや遠く、入わが入る可き門はいや遠みVという一あの深い流嵐の嘆きや痛みは、求むべくもなかった。

「生きらるるだけは生きても見たい」——この「草枕」一篇の最後の一句（同時にそれは旅の終りの一句でもあった）が、その最初の旅の冒頭に、即ちその旅の出立にあたって記された（恐らくは藤村の最初の抒情詩と目される）詩篇「別離」（白表紙女学雑誌三三七号、二十六年一月）末尾の——入見よ、われは死する能はず、Vという一句とあい呼応することを思えば、我々はそこに一箇の見事な円環の閉じられていることを——即ち、彼が「透谷の死そのものを自らの拠点とし巢立」ちつつも、ついに何を「学ばなかった」か、あるいは学びえなかったかというこの意味を、したたかに思い知ることができよう。

近代詩の系譜を辿るにあたって、「藤村から透谷へ」という——この逆流的な課題の孕む重さを、我々はいま一度、みづからの手に受けとめてみる必要がある。